

# マーガレット・フラー超越主義思想の一断面

## —教育論としての読み替えの試み—

山本孝司

### I. はじめに

#### 1. 問題の所在

超越主義は一般に19世紀アメリカにおいて文学、宗教、哲学に影響した思潮として周知される。ヘーゲル主義ほどには制度的変革をもたらすものではなかったものの、運動としての超越主義は、宗教におけるピューリタニズムの克服、学校教育における方法的改良、政治におけるメキシコ戦争に対する反戦、奴隷制廃止と女性解放に少なからず影響した<sup>(1)</sup>。

本稿でとりあげるマーガレット・フラー(Sarah Margaret Fuller, 1810-1850)は、超越主義に与した女性思想家のうちの一人であり<sup>(2)</sup>、社会運動のうち女性解放運動で特に影響力をもった人物である。ボストン時代のフラーの活動と著作、すなわち1839年から44年間の「会話」<sup>(3)</sup>、1845年の『十九世紀の女性』(*Woman in the Nineteenth Century*)の出版は、当時の女性たちを解放運動のなかに引き込み、後続のフェミニスト活動家たちに超越主義の視点の基礎を提供した。この視点は、人間性への信頼が貫かれていた点において、他の超越主義者たちの人間観にも共有された見方であった。フラーの人間性への信頼は、特に性別の超越という点において特徴的であった。

その間1844年には、彼女は「ニューヨーク・

トリビューン」(NY Tribune)紙の編者ホーレス・グリーリーの誘いで、当紙の記者兼文芸評論家となり、1846年から他界する1850年までアメリカ・ジャーナリズム史上初のヨーロッパにおける特派員を務めた。特派員としてはイギリス、フランス、イタリアを転戦し、イタリア在任時にはヨーロッパ革命の余波によって起こったイタリア統一運動にも遭遇した。その運動の渦中で、彼女はマッツィーニ(Giuseppe Mazzini, 1806-1872)<sup>(4)</sup>率いる「青年イタリア」(*Giovine Italia*)の共和主義的「人民」概念をアメリカに伝え、運動へのアメリカの支援を取り付けるよう試みるなどかなり「革命」の深部にまで入り込んでいった。

1850年、イタリアからアメリカへの帰路、乗船した船の難破により志半ばで他界しているが、フラーはロマン主義的色彩の強かった超越主義のメンバーのなかで、1840年代の時点で国家的規模での社会制度変革の試みを経験した人物といえる。こうした変革の試みは、10年余り遅れて、南北戦争としてアメリカでも生じることになる。フラーの社会問題に関する意識は、具体的には階級、人種、性別によらない大衆(「コモン・マン」common man)によって構成される社会へと造りかえることと関連していたが、こうした思想は当時のアメリカ国内においては先進的であった。変革の試みのなかで

も、1830年代、40年代にフラーがアメリカ社会において精力的に取り組んだのは、性別によらない民主政治の実現であった。超越主義者としてのフラーの思想は、こうした女性解放運動のなかで発現しており、「運動」の中心は、執筆や「会話」による人々への啓発活動に置かれた。つまり、本論で詳述するように、エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-1882) が超越主義思想の中核に据えた「自己信頼」の思想は、フラーの場合、女性解放運動の渦中で、女性たちによる自己信頼の問題として鮮明になったのである。本稿では、こうした啓発活動を大きく「教育」と捉えたいうえで、フラーの超越主義思想の一断面としての女性解放運動から彼女の教育思想を描出することを課題とする。

## 2. 先行研究および考察の視点

フェミニズム思想史のなかでは、フラーはアメリカにおける女性の権利拡張運動の先駆者として位置づけられ、彼女の活動には一定の評価が与えられている<sup>(5)</sup>。超越主義のなかでもエマソンやソロー (Henry David Thoreau, 1817-1862) といったキャノン作家 (Canon Author) とは異なり、アメリカ文学研究においては、フラーはながらく取り上げられることなく埋もれた存在となっていた。しかしながら、20世紀終わりから今世紀のはじめにかけての文学研究のトレンドともいえるべき「キャノン解体」<sup>(6)</sup>と周辺領域に存在する作家および作品群の発見努力によって、フラーは見出されることになった。ここでも、とりわけジェンダー論研究者によって、こうした「発見」が精力的に取り組まれた。

フラー研究がその拠り所としている伝記

に関しては、彼女の死の直後である1852年に、同じ超越主義のメンバーであったエマソン、ヘンリー・チャニング (William Henry Channing)、ジェームズ・フリーマン・クラーク (James Freeman Clarke) が中心となって『マーガレットと友人たち』(Margaret and her Friends) というタイトルの本が出版されている。続く1884年のジュリア・ワード・ハウとT・W・ヒギンソン (Julia Ward Howe & T. W. Higginson) によって著された伝記『マーガレット・フラー・オッソリ伝』(Margaret Fuller Ossoli) 以降、フラーは長らく歴史のなかで埋もれてしまっていた。その後、フェミニズム研究の高揚のなかフラーへの関心も再度高まり、1992年にキャパー (Charles Capper) によって『マーガレット・フラー』というタイトルで二巻本の伝記が著された。この伝記出版の同年に、アメリカにおいてマーガレット・フラー協会 (The Margaret Fuller Association) が発足したという事実も、フラー研究への関心が高まりをみせている一例である。

伝記以外のフラーの評価に関しては、ヘンリー・ジェイムズ (Henry James, 1843-1916) によるフラー評は巧く彼女のことを言い当てている。「この才気に溢れ、活動的であった不幸な女性は、不思議な運命のもとに一生を送った。知的で鑑識力のあった仲間たちの考え方、生き方、感情等において大きな場所を占めていた情熱的ニューイングランド人であったはずであるにもかかわらず、彼女が死後に残したものは思い出の思い出に過ぎない。その役割も声価も非凡なものであったが、なぜそうだったのか、なんとも納得がいかない。彼女は話上手、いや彼女こそ話上手の名に値する人だったと

言ってよいだろう。座談の天才であった。また、絶対的ではないが、途方もない自負をもっていた。……彼女が残したものは、偉大な女優の名声と同種のものである。その書いたものには非常に美しい部分が見られるし、ほとんど全部が本当に面白い。しかし、彼女の価値、作用、勢力（魅力とは言えない）などは個人的で実際のなものだった。」<sup>(7)</sup> ジェイムズは「個人的で実際の」と限定しながらも、フラーの才能、とりわけ弁舌に関する才能に対しては好意的な評価を与えている。

後の文学研究におけるフラー像に強く影響したのが、同時代人ホーソーン (Nathaniel Hawthorne, 1804-1864) との関係で描かれるフラー評である。ホーソーンの大長編小説のうちの一つ『ブライズデイル・ロマンス』(1852)<sup>(8)</sup>の主人公女性の権利運動家ゼノビアはフラーがモデルと言われている。実際にホーソーンとフラーが直接交流をもっていたのは1839年から1846年の間のフラーがボストンにいた5年間であった。もっともホーソーンの子のソフィア<sup>(9)</sup>はフラーが主催した「会話」の会員であり、ホーソーン夫妻とは、フラーが他界するまでの間、物理的には距離がありながらも、付き合いはあった。『ブライズデイル・ロマンス』のなかでゼノビアは、知性溢れる女性であり有能な「演説家」であるが、最終的にはある男性への感情的支配から抜け出せずに自ら死を選択するという、「新しい女性」の限界を象徴する像として描かれる。この「新しい女性」像こそが、フラーが生涯を通して追及した、自立し、自分の意志で行動する女性、男性と同様に理知的である女性であった。ホーソーンは、こうした像に一定の理解を示しながらも、究極

的にはピューリタン社会における「忠実な女性」像の信奉を脱しきれなかった。ホーソーンによるフラー理解についても同様のことが言える<sup>(10)</sup>。このようなホーソーンによって提示され、数々の伝記群によって確立された、才気溢れる自立した女性、父権制社会にあって、男性に引けを取らない女性というフラーのイメージは、今日のフェミニズム研究、アメリカ女性作家研究にも踏襲される傾向にある。

日本では、文学において、超越主義者の一人として紹介されるほか、フラーの「ニューヨーク・トリビューン」紙ヨーロッパ特派員時代のイタリア・リソルジメント運動とのかかわりに焦点化した上野の研究等、数件フラーを単体で扱った研究があるが、その他の領域においては、女性史、フェミニズム研究で、アメリカにおける女性解放運動の先駆的存在として名前が登場する程度である<sup>(11)</sup>。

本稿に掲げる副題とのかかわりでは、アメリカ教育史に関する研究において、超越主義が19世紀末から生じるアメリカ進歩主義教育の思想的源流に位置づけられてはいるが、単体として研究対象となるのはエマソンとブロンソン・オルコット (Amos Bronson Alcott, 1799-1888) であり、幼児教育まで含めるとピーボディ (Elizabeth Palmer Peabody, 1804-1894) がそれに加わるのみである。管見する限り、教育思想研究でフラーが取り上げられている例は皆無である。

この小論においては、人物としてのフラーに関する若干の考察をするとともに、彼女のかかわった女性解放運動における諸活動のなかから彼女の超越主義思想を抽出することを目的とし、その思想を特に教育と結び付けながら、彼

女の超越主義思想を教育思想として読み替えることを目論む。

## II. フラーの「女性解放」思想形成略史と超越主義者としての位置づけ

### 1. フラーの生育略史—「女性解放」思想形成にかかわるエピソード

マーガレット・フラーは1810年5月23日、父ティモシー・フラー (Timothy Fuller) と母マーガレット・クレイン (Margaret Crane) の第一子としてボストン近郊にあるケンブリッジポートで生まれる。フラー家の家族構成は、フラーの他にジュリアン、ユージン、ウィリアム、エレン、アーサー、リチャード、ジェームス、エドワードの二人妹六弟がいた。

キャバーによる伝記によると、幼少期における彼女に対する家庭教育のユニークさが人目を惹く<sup>(12)</sup>。フラーの父ティモシーは、ハーバード出身で、1817年から18年間ワシントンで代議士を務めた人物であった。家庭における教育には彼が責任をもち、フラーは長女として、父から徹底した知的英才教育を施される。弟で長男のユージンが生まれたのは1815年で、フラー誕生から5年後のことであったが、それまでにフラーは父の知的後継者として、ラテン語、フランス語、論理学、修辞学、ギリシア語等の男子が修める学科をすべて教えられていた。

19世紀のピューリタンの性役割観が支配的な社会にあって、女性の精神的自由、女性が個人として自立することの重要性を説いたフラーの人間観は、ユニテリアンを信仰する家庭に育ったということのみならず、まことに父ティモシーから受けた男子と同様の教育の賜物であったといえる。フラーは後年次のように述べて

ている。「私は今世紀もっとも頭のいい男性のすべてと知り合った。そして彼らがだれも私以上でないことを知った」<sup>(13)</sup>。

しかし、男子同様の英才教育はフラーにとって良い面ばかりではなかった。どんなに学問を身につけ知性を磨いても、フラーが男子と同じようにハーバード大学入学が許可されることはなかった。こうした現実、父から男子同等、否、男子以上の知的訓練を施されたフラーにとっては屈辱であった。これに関連して、フェミニズム研究の立場からガーバーは、父ティモシーから受けた教育によって身に付いたフラーの文体、講話スタイルが「服装倒錯的」であること、またそのことが原因で当時のアメリカ社会においてフラーが圧力を受けたと指摘している<sup>(14)</sup>。

父がコレラで他界すると、25歳にして戸主となり、家庭を経済的に支える父親の役割も果たさねばならず、内外ともに「男性のように」振る舞うことを余儀なくされる。アーバンスキは「フラーの生涯そのものが、あらゆる女性たちの自己探求物語の原型を形成する伝説的物語だったのだ」<sup>(15)</sup>と評している。

### 2. 超越主義におけるフラーの位置づけ

#### (1) フラーの「神」観念にみる超越主義的要素

上のような所謂「男まさり」に生育したフラーが、19世紀のピューリタニズムが色濃く残る社会にあって、因習打破的な思想を発信している超越主義に惹かれたのは必然であったのかもしれない。フラーがエマソンと知り合ったのは1837年あり、ピーボディの仲介によってであった<sup>(16)</sup>。1838年から、フラーはピーボディとともに「ヘッジ・クラブ」(後の「超越

クラブ」(Transcendental Club))の会員となり、エマソンをはじめ超越主義者たちと知的交流をもった。フラーの超越主義思想に関しては、エマソンら超越主義者との交流によって、生じたというよりも、すでに超越主義のエッセンスを持ち合わせていた。具体的には、フラーは元々宗派的にユニテリアン的な自由な気質を有していたし、文芸におけるドイツ・ロマン主義の流れを汲むコールリッジ (Samuel Taylor Coleridge)、ポスト・カント派の哲学にも深く通じていた。

彼女の超越主義思想は、超越主義者たちと交流をもつ以前の日記や手紙のなかにも散見される。たとえば「超越クラブ」に入会する直前の1838年に友人に宛てて次のように書き送っている。「私の記憶にはある日のことが焼き付いている。それは物事の魂に交流があった、かつての穢れない天国のような日々です。……それは感謝祭の日でした。私は穏やかな森の中の詰まった噴水の傍で、一人でいました。私はそこで数時間過ごしましたが、その間、いろいろな時代の思考と感情に満たされました。……すべての光景が私の経験から生じてきているように思えました。そして、私は、魂が天国から降ってきていない限り、この乾ききった世界では決して生き延びられないと確信しました。もし私が望むなら、それらを集めるために太陽が昇るように自分自身も高まることもできる。その夕刻、私は教会の庭に行き、月がバラ色の雲の陰に隠れた。三日月は、天へと向かう尖塔にそびええました。もし私の生活が教会になるのなら、それらは信心深い考えと厳粛な音楽で満たされるでしょう」<sup>(17)</sup>。この彼女の表現には、エマソンが「自然論」(Nature)のなかで示したよう

な、既成宗派、宗教の枠を超越する、自然のなかに自己の精神を投影させる超越主義に特徴的な神理解、自然理解を見て取ることができる。元来、宗教的観点でみたときに、超越主義は19世紀にも色濃く残っていたピューリタニズムを継承する会衆派に代表される宗派宗教に対する批判から起こってきたという経緯がある。超越主義者たちは、人間と自然とが無限なる精神(大霊: Over Soul)によってつながるという独特の自然観、宇宙観を持ち、既成宗派の神を信仰する代わりに、人間のなかに流れる無限なる精神である内なる神性を信頼した。こうした自然観、宇宙観が、「自らを恃みにしてよい」という彼らの「自己信頼」の思想に結びついている。この「自己信頼」の思想が、先にあげたフラーの言表のなかの「私の生活」と「教会」とが等値されるところに象徴的に示されている。

彼女の日記には、すでに1832年の時点で、エマソンに匹敵するほどの強い自己信頼の心情が書き記されている。「私のプライドはこれまで経験してきたいかなる感情にも優越している。……私は永久的な進歩を信じ、神の存在を信じ、美と完全さについて信じている。それらとの同化は私の全生涯にわたって努められる。」<sup>(18)</sup>神の属性である「美」と「完全さ」への同化は、超越主義者にとっては、可能性としてみたときに「自己信頼」の思想の礎であるとともに、ここに示されているように、個としての人間が目指すべき実践的命題ともなっている。こうした命題は、それぞれの人間が内に神を宿すがゆえに万人に認められる可能性であるとともに、究極的にはそれぞれの個人によって目指される道徳的完成の要請として超越主義者

たちによっては提示される。その意味では、超越主義の教義は、実践においては、きわめて個人主義的な色彩が強かったといえる。こうしたフラー超越主義思想の女性解放運動と関連した教育思想としての展開については、節を改めて論究する。

## (2) 具体的な活動

超越主義者たちの活動は宗教、文学、教育等広範囲の領域にまたがるが、そのなかで彼らの機関誌『ダイアル』(*The Dial*)の初代編者を務めたのはフラーであった。編者の傍ら、フラー自身も『ダイアル』には「一大裁判」(*The Great Lawsuit. Man versus Men. Woman versus Women.*)等の論文を寄稿している<sup>(19)</sup>。

フロシングムによる『ニューイングランドの超越主義』(*Transcendentalism in New England*)のなかではフラーの章タイトルは「批評家」(*The Critic*)という表現が与えられている。フロシングムは次のように述べる。「マーガレット・フラーは批評家であり、彼女は訓練された認識というよりも天賦の才能として批評家であった。彼女の天才は彼女自身が導いたものである。人々も事柄も裁断を受けるために彼女のもとにやってきては、彼女の裁断を受け入れた。鋭く、率直であるが、慈悲深く、彼女は内面から裁断した。彼女に対しては、彼女の伝記作家が一致して語っているように、『心にあるすべての秘密が白日の下にさらされた』<sup>(20)</sup>。

執筆とならんで、超越主義者として彼女が人びとの啓発のために精力的に行ったのは、「会話」(*Conversation*)であった。フラーの書き物に対しては、彼女の幼い頃からの教育によって身に付いた教養の深さから、難解さが指摘さ

れることしばしばであったが、彼女の講話(会話)に対しては当時としても定評があった。ちなみにフラーの書き物の難解さは、代表的作品である旅行記『五大湖の夏』(*Summer on the Lakes*)や『十九世紀の女性』にみられるように、フラーの文体が、基本的には散文スタイルで、そのなかに詩、ドラマ、説教、書評などが入り混じっていて、その他古典や現代小説からの引用などが次々織り込まれていることによる。

超越主義に関しては、そのリーダーであるエマソンが、ニューヒストリシズムやニュー・アメリカニズム、フェミニズム等の観点からは、アメリカにおける民主主義と資本主義の体制と秩序が確立される時代にあつて、同時に構築されつつあつた白人男性知識人による文化の帝国と覇権主義を身をもって遂行したと評される。こうした見方に対しては再検討の余地があるにしても、超越主義グループの構成メンバーが、2人の例外を除いて男性によって占められていたこと、しかもユニテリアンの牧師出身が多かつたことは、ある特定の文化の代弁者であつたと見なされるに十分な理屈を与えることも確かである。一方のピーボディは、超越主義者としての実践に女性であることの視点は持ち込まなかつたのに対し、フラーにとっては女性であることが、その活動のモチーフともなっていた。

## Ⅲ. 『十九世紀の女性』にみるフラー教育思想の特質

前述したような編者、記者、文芸評論家としての経歴の陰に隠れてしまっているが、フラーには、短い期間ではあるが、教師としての経験

もある<sup>(21)</sup>。彼女は、父の死後、1837年から38年の間の2年間、フラーはハイラム・フラー(Hairam Fuller) 経営の“the Greene Street School”で教鞭をとっている。この学校は、良家の子弟を対象としてドイツ文学、イタリア文学、フランス文学について講じられていた。生徒は20名ほどであった。ここでのフラーの教員経験は、父の死後、家長となった彼女が、弟妹たちを養うための収入を得る目的でなされた消極的選択であったが、周囲から教師としての彼女は高い評価を得ていた。

この学校は前出のブロンソン・オルコットのテンプル・スクールをモデルとしており、フラーの教育実践においても子どもたちの想像力を育むために自己表現を促す取り組みがなされていた。子どもたちを対象とした教育においても、フラーは「女性文化」(female culture)について説いて聞かせている。キャパーは、この学校における出来事がいかに子どもたちへの感情と知性への影響したかを語るのは難しいとしつつも、「われわれの性別が有能であり、一部の人々が考えているように、私たちの知的養育が全く不可能ではないということを私たちが示すことを励ましてくれた」というある女子生徒の日記を紹介し、フラーの影響を示す一例としている<sup>(22)</sup>。

教師という職を学校教育に限定すると、厳密な意味においてはその範疇から外れてしまうが、前述したように1840年代の前半にフラーは「会話」という形で成人教育を行っている<sup>(23)</sup>。「彼女[フラー]にとって…コミュニケーションにおける本質的要素はインスピレーションの安定性と強度であった」<sup>(24)</sup>というフラーの伝記作家メーレンの指摘にあるよ

うに、フラーの表現は「インスピレーション」(inspiration)によってその時々感じたままになされることが多かった。

こうした「会話」自体が「もっかのところ何も誇るものをもたないが、精神的な改良へとつながる主張をもつ、その町のよく教育された、思慮深い女性にとっての連合する場」<sup>(25)</sup>を提供するためでもあった。

フラーはかつて「しかし女性にどのような職務が向いているのかと尋ねられるのであれば、私はどんなものでもと、答えましょう。あなた方が出してくるものならなんでもかまいません。もしお望みでしたら、女性は船長にだってなれるでしょう。」<sup>(26)</sup>と書いていた。彼女のこの有名な発言は、社会の偏見に晒されずに女性が成長を遂げるならば、感情、知性、意志のどの面においても男性に劣ることなく力量を発揮できるという信念が含まれている。

1844年、フラーはアメリカ史上初の長編にわたる女性論の書である『十九世紀の女性』(*Woman in the Nineteenth Century*)<sup>(27)</sup>を著す。「思考や感情のレベルがさらに高まれば、男性は女性の主人や教師としてではなく自らを兄弟や友人として見なすようになるだろう。男性が女性と等しく尊敬の絆で結ばれるならば、それを機能させるための順番や運用は価値を持たないであろう。女性が必要としているものは、女性として行動し、規則を作るのではなく、私たちが共通の家を離れたとき、女性に力を開かせるために成長する人格、識別する知性、邪魔されることなく自由に生きる魂としてあることである」<sup>(28)</sup>。

『十九世紀の女性』のなかで、フラーはサンドとウルストンクラフトをひきあいに出して

社会の倫理的・道徳的な問題提起を行っている。「(一般にジョルジュ・サンドの名で知られる)デュドヴァン夫人 (Madame Dedevant) 同様メアリー・ウルストンクラフトも今日では、女性の権利の幾分新たな解釈の必要性を、彼女が書きたいかなるテーマよりも、よく証明した女性である。このように才能豊富で、優しい感情に充ち、有徳で、和やかで調和をもつ存在は、つながりを断たれた狭い場所ですどこにも見いだせず、生まれつき彼女たちがアウトローになることは必定であった。……メアリー・ウルストンクラフトやジョルジュ・サンドのように社会を改革しようとする者は、奔放な熱砂の衝動のなかで叫んでいるのではないということを示さなければならない。改革者の生活は……みずから厳格な法の遵法者でなければならない」<sup>(29)</sup>。

ここに言われる「法」は世俗的な法ではなく、ソローが言うところの「崇高なる法」(higher law)である。そしてそれはフラーが別の箇所です「もし黒人と女性が主に仕える肉体に魂を宿しているなら、そのときにのみ、彼らは報われる。魂には一つの法則しかない。そして、もしそれを解釈するならば、男性や男性の息子としてではなく神の息子であらなければならない」<sup>(30)</sup>と述べているように、すべての人間に内在する魂の法則ともいべき普遍的な法則であった。フラーは、ウルストンクラフトやサンドのように、すべての女性に、「崇高なる法」に従う生き方を求め、そのことによる社会変革を主張したのである。

その一方で「今や女性はひとりも存在せず、身体だけ大きくなった、精神的には独立していない人々が存在するのみである」<sup>(31)</sup>とフラーは当時の女性に対して苦言を呈してもいた。この

現状を打破するため、彼女は繰り返し「彼女の手に威厳が与えられるためには、彼女は一人で立つことができなくてはならない」<sup>(32)</sup>訴えている。フラーは女性の隷属的状況の解決の前に、当時の女性の在り方そのものの改変が必要であると説いたのである。それは、「一人で立つこと」というフラーの表現に示されるごとく、女性たちに「自己信頼」(self-reliance)に基づく自己陶冶、自己改造を求めることを意味していた。

こうした戦略にみられる個人主義的側面に関しては、きわめて超越主義的であると言える。超越主義者たちは様々な社会改革を試みているが、その手段は、個人の精神的改革であった。彼らにあっては「社会改革」という一大事業も、個人がそれぞれの徳性を覚醒させることによって可能となる、きわめて個人主義的な一面をもっていた。フラーの女性解放の思想も、こうした個人による自己変革を源泉とする点では、究極的には自己教育の原理であった。

#### IV. 結び

以上、本稿ではフラーの生育史のなかから「女性解放」思想形成にかかわるエピソードをとりあげた上で、彼女の超越主義思想を大きな意味での「教育」実践のなかに見出すための論考を行った。そのなかで、女性解放の書としての『十九世紀の女性』を女子に特化した教育論へと読み替えを行った。

彼女の超越主義思想の発露は、とりわけ女子を対象にした「教育」のなかでなされ、このバックボーンとして彼女の幼いころに父ティモシーから受けた英才教育によって培われた「新しい女性」観の影響するところ大であった。そ

して超越主義者たちが、様々な形をとって目指した社会改革という事業は、彼女にとって、女性の権利拡張とも結びつき、様々な著作や「会話」を通しての女性たちにむけた啓発活動を端緒としていた。そこで発せられた彼女のメッセージは、究極的には自己信頼の思想を行動原理とし、個としての女性たちの自己研鑽に社会における男女関係の組み換えの可能性を見出すという意味合いにおいて個人主義的であった。こうした個人主義的な側面は、個としての人間の精神のうちに神性を認めることによって可能となる、エマソンをはじめとする超越主義者が共通に持ち合わせていた人間観、自然観、宗教観の表出でもあった。

アメリカ的な「セルフメイド・マン」像にもつながる、改革の原点を自己に据えた自己陶冶の理念として教育論を展開したからか、他の女性の権利活動家ほどはっきりと政治性は示されていないが、フラーの思想は後の女性活動家から支持される。

注(1) この思潮の担い手は、文学、芸術における「アメリカン・ルネッサンス」(American Renaissance)の担い手と一部重なっており、彼らの営為はアメリカ独自の文学、芸術の出発点となる旧大陸(ヨーロッパ)からのアメリカの知的独立宣言として位置づけられている。しかしながら、制度変革という観点では、その思潮に続く、ヘーゲル主義ほどには強い影響力はもたなかった。というのは超越主義自体が、18世紀後半から19世紀前半にかけてのアメリカにおけるキリスト教宗派あるいは教会の分裂、分派の動きのなかから台頭した思潮であり、宗教的な運動につきものであるロマン主義的色彩の濃い性格があったからである。

(2) フラーの他には、アメリカにおける幼稚園教育運動の先覚者エリザベス・ピーボディがいる。

ピーボディは超越主義者であるブロンソン・オルコットがボストンで経営するテンプル・スクールの助手を務めていたが、彼女が助手を辞した後の後任を務めたのがフラーであった。

- (3) 19世紀アメリカにおいては、成人教育の一環として会話の形態をとった啓発的研究サークルが登場している(ここでは日常会話という場合の会話と区別して、これら成人教育の一環として行われた会話を「会話」と表記する)。フラーは、同じく超越主義者であるエリザベス・ピーボディの経営する書店にボストンの女性たちを集めて私的な研究サークルを主催していた。
- (4) マツイーニは、ナポレオン帝政期のジェノアに生まれ、ジェノア大学教授の父を持つ。本人はジェノア大学において法学を学び弁護士として開業するも、次第に彼の関心は文芸批評に向かう。フラーとの接点もこの文芸批評を通じてであった。フラーはマツイーニとイギリスにおいてカーライルを通して知己になる。当時マツイーニは亡命中であった。
- (5) デュボイスとデュメニルは『女性の目からみたアメリカ史』(Through Women's Eyes An American History with Documents)のなかで、フラーを「他の女性の権利活動家ほどはっきりした政治性はないが、それにもかかわらず、彼女は、彼女の思想と教養によって女性活動家から称賛された」と評している。(デュボイス&デュメニル『女性の目からみたアメリカ史』明石書店、2009年、p.264)
- (6) アメリカ文学史研究において重要視されてきた作家の作品は「キャンノン(正典)」(canon)と位置付けられてきた。たとえばフラーと同時代人では、エマソン、ホーソーン、メルヴィル、ソロー、ホイットマンらがそれである。文学史研究において、こうした「キャンノン作家」論から、これまで注目されることがなかった周辺領域の作家に光が当てられることになった傾向を指して「キャンノン解体」と称している。
- (7) James, Henry, *Hawthorne* (Cambridge Library Collection - English Men of Letters), Cambridge Univ. Press, 2011, p. 62.
- (8) ホーソーンの『ブライズデイル・ロマンス』のライトモチーフとなったのが、彼自身が参加した共同実験農場「ブルック・ファーム」の経

- 験である。フラーはこの実験農場には直接参加はしていなかったが、この作品に登場する知性に溢れる活動的で魅力的な女性ゼノビアはフラーがモデルとなっていることが定説となっている。
- (9) ソフィアは、前出エリザベス・ピーボディの妹である。ピーボディ家には、エリザベスが長女、次女はマサチューセッツの教育長であったホレス・マン (Horace Mann, 1796-1856) 夫人のメアリ、そして三女がソフィアの三姉妹がいた。
- (10) フラーが事故死したときのホーソーンの日記は次のように書かれている。「マーガレット・フラーは一大いかさま師だった。もちろん才能と徳性をそなえていた。それがなければあれだけのいかさま師にはなれなかっただろう。……マーガレットの最後はたしかに悲劇的だった。しかしマーガレットとアホな夫と小さい息子を難破する運命の船に乗せた神は親切だったのだ。」(吉田とよ子『エマソンと三人の魔女』 勉強出版, 2004年, p. 109-110)
- (11) 上野和子は「マーガレット・フラー—イタリア・リソルジメントへの軌跡—」と題して3部作の研究を行っている。
- (12) キャパーは幼少期の章題を“Childhood Enlightenment”として、彼女の知的開眼の特異性について強調している。Capper, Charles, *Margaret Fuller; An American Romantic Life*, Oxford Univ. Press, 1992, p. 24-56.
- (13) 吉田『エマソンと三人の魔女』 p. 110.
- (14) Rix, Rebecca, “Margaret Fuller; Performing Civic Equality,” (<http://www.vcu.edu/engweb/transcendentalism/criticism/rixonfuller.html>.)
- (15) Urbanski, Marie Mitchell Olesen (ed.), *Margaret Fuller: Visionary of the New Age*, Orno, ME: Northern Lights, 1994, p. 144.
- (16) フラーは、グロトンの農場にいたときに、エマソンの論文を読み、エマソンに会うことを切望するようになった。はじめヘッジが仲介したときには、エマソンがフラーの「悪評」を耳にしていたことから、会見は実現しなかったが、ピーボディの仲介によってはじめて実現したといわれる。(吉田『エマソンと三人の魔女』 p. 132)
- (17) MF to young friend, Oct. 21, 1838, in *Women in the Nineteenth Century, and Kindred Papers*, ed., Arthur B. Fuller (1874; reprinted ed., New York, Greenwood Press, 1968), p. 359-360.
- (18) Frothingham, O. B., *Transcendentalism in New England; A History*, New York, G. P. Putnam's Sons, 1875, p. 267-268.
- (19) この論文を基にして、後年彼女の女性論の集大成ともいえる『19世紀の女性』が出版されることになる。『ダイアル』に掲載された彼女の手によるその他の論文、詩は次である。“New Year's Day”, “The Wrongs of American Women. The Duty of American Women”, “Thongs and Thoughts in Europe No. XVIII”. “To the Same. A Feverish Vision”, “Leila in the Arabian Zone”, “Double Triangle”, “Serpent and Rags”, “For the Power to whom we bow”, “The Sacred Marriage”, “Flaxman”, “Meditations”, “Sistrum”.
- (20) Frothingham, O. B., *Transcendentalism in New England*, p. 287.
- (21) “the Greene Street School” 以外にも2度ほど教員経験をもっている。一つ目は、父ティモシーが国家議員から弁護士を経由して農場経営者へと転身したときである。彼はグロトンで農場経営を始めるが、その農場の敷地内に学校を作った。その際に、子どもたちの教育にあたる教師としてフラーを充てた。フラーはこの学校で、フランス語、イタリア語、ラテン語のほか、歴史、地理、文法、作文といった学科を7歳から13歳までの子どもを対象に教えた。父の作った学校で教鞭をとることは、フラーの本意ではなく、ヨーロッパ旅行のための報酬を得るという条件で引き受けられた仕事であった。
- 今一つのフラーの教師経験は、同じ超越主義のメンバーであるブロンソン・オルコットのテンプル・スクールにおける助手の期間に得られた。フラーの前任者はエリザベス・ピーボディであり、後にアメリカ幼稚園教育運動の先覚者に位置づけられる人物であった。彼女の後にテンプル・スクールの記録をとったのがフラーであった。残念ながら、フラーが助手を務めたオルコットのテンプル・スクールは、1839年に黒人の少女の入学を認めたことが導火線となって閉校されることになる。幼児を対象とした学校

教師としての経歴は、オルコット同様にフラーもテンプル・スクールが最後となる。

- ② Capper, Charles, *Margaret Fuller; An American Romantic Life*, p. 236.
- ③ 「フラー・カンバセーション」(Fuller Conversation) というセミナー・クラブを組織し、1838年11月6日より週一回十三週セットの初回シリーズが受講者25名で開催された。
- ④ あるセミナーで「生きることは何か」「人は何のために生きるのか」という議題で討論した際、参加者全てが意見を言い終わった後、フラーが意見を述べたのであるが、その意見の完璧さに参加者が感動し、そこに参加していたエマソン夫人が後にその感動的な意見をもう一度聞かせて欲しいと言うと、「覚えていないわ。インスピレーションで話したから」という答えが返ってきたとうエピソードがある。(Mehren, Joan Von., *A Life of Margaret Fuller: Minerva and the Muse*, Univ. of Massachusetts, 1994, p. 193.)
- ⑤ Fuller, M., *Women in the Nineteenth Century, and Kindred Papers*, ed.. Arthur B. Fuller (1874; reprinted ed., New York, Greenwood Press, 1968), p. 113.
- ⑥ Fuller, M., *Woman in the Nineteenth Century*

(New York, Dover Publications, Inc., 1999) p. 115.

- ⑦ これに先立ち彼女は、女性の可能性と女性の仕事との間の葛藤に関する記事を書いている。『十九世紀の女性』はこの記事を長編化したものである。本書は、概観すると、現状告発と女性の潜在能力についての解説という二本柱によって構成されている。今日のアメリカ女性史研究において、この書は、ウルストンクラフト(Mary Wollstonecraft, 1759-1797)の『女性の権利擁護』(*A Vindication of the Rights of Woman*, 1792年)について、女性の手によるフェミニズム宣言として位置づけられている。
- ⑧ Chevigny, Bell Gale, *The Woman and the Myth: Margaret Fuller's Life and Writings*, rev. ed., Boston, Northeastern UP, 1997, p. 248.
- ⑨ Fuller, M., *Woman in the Nineteenth Century*, p. 46-48.
- ⑩ Chevigny, Bell Gale, *The Woman and the Myth: Margaret Fuller's Life and Writings*, p. 248.
- ⑪ Fuller, M., *Woman in the Nineteenth Century*, p. 96.
- ⑫ Fuller, M., *Woman in the Nineteenth Century*, p. 96.